

## 『兵部卿物語』試論

—『三宝絵』との関わりを中心に—

大倉 比呂志

一

今上帝（以下、帝と称する）と后宮は第二皇子である兵部卿（以下、二宮と称する）を鐘愛し、将来即位させようと思っていたわけだが、世間からの指弾を考慮して、とりあえず第一皇子を東宮に即けたのである。その二宮は「御かたちの清らにうつくしくおはしまし」し、「御才かしこくおはしますこと、また世にな」<sup>(1)</sup>（以上、7）い様相であるから、「世になくきよなる玉の男皇子」<sup>(2)</sup>で「わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびか」<sup>(3)</sup>（『源氏物語』桐壺巻）す光源氏になぞらえられており、帝の弟の式部卿宮の姫君（以下、姫君と称する）を弟宮の死後、帝は引き取ることになるわけだが、二宮と姫君とは従兄妹同士ということになる。<sup>(3)</sup>その後における二宮と姫君との関係は、

①宮（注二宮）は幼くより（姫君ヲ）見馴れ給ふに、幼き御ひとへ心にかかりて、苦しきまで思はししみつつ、はかなき花・紅葉につけても、心寄せこと

にあはれを尽くし給ひしを、おとなびさせ給ふまに、いと氣遠くもてなさせ給ひて、ありしやうに御簾のうちに人も入れ給はず、御遊びなどの折々、琴・笛の音に聞き通ひ、ほのかなる（姫君ノ）御声などを慰めにて（二宮ハ）過ぐし給ふを、……（8）

とあり、①②は光源氏が入内した藤壺に対して、

①幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。

②大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも（桐壺帝ハ光源氏ヲ）入れたまはず、御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めにて、内裏住みのみ好ましくおぼえたまふ。（以上、桐壺巻）

と各々対応しているものであり、姫君は藤壺になぞらえられている。このように二宮と姫君の造型には光源氏と藤壺のそれが大きく関与しているわけだが、二宮は姫君への恋慕が強まっていくにもかかわらず、

②たぐひなき（姫君ヘノ）御心ざしといひながら、この御ことばかりは、さてあれとも（帝ハ）任せ給はじ、世の人の思はんこともめづらしげなきやうにぞあ

るべきなど、とぎまかうさま世のそしりを思ほすにはあるまじきことと、(二宮ハ)御心に制しつつ、深く思ほし包むにぞ、あやにくに(二宮ノ)心は砕け増さりつつ、……(8)

とあるごとく、二宮は姫君に対する恋慕を胸に秘めているのである。それゆえに、「いかならずらへんならんだにあらばやと思ほすにや、人知れぬ御忍び歩きなども重なれど、御心とどむべき方なき」(8)状態が続いていくわけだが、北山に気晴らしに出かけた帰途、西の京あたりで、「かかるくだくだしきあたりには、似つかはしからぬ」(9)箏の琴がかすかに聞こえてきたので、垣間見たところ、「あけくれ思ひこがれ給ふ人(注一姫君)の御様に、ふと思ひ出でられて」(10)と語られているように、姫君に類似し、大膳亮女というふれこみの女君(注一実は按察大納言女であるが、両親が亡くなったために、大膳亮の妻である乳母が養育していた)を発見して、立ち去る気持ちがいかなかったのも、「かかる下が下の品まで尋ね出で、ぬし知らぬ恋路に迷はむも、いと余りなる心の程」(11)であると考えて、「中将」という偽名で女君に消息し、翌年の春、偶然にも乳母の清水参籠中に女君を訪れた二宮は、女君と情交を持つに至るのである。というのは、「かの御かたち(姫君ニ)通ひたるを慰めにて」、「それ(注一姫君)かと思ふ折々あれば」(以上、14)と語られているように、女君が姫君と類似しているからであり、前述したごとく、姫君が藤壺になぞらえられている点からすれば、女君は紫上に該当するわけだが、『源氏物語』では光源氏の藤壺から紫上への移行が〈ゆかり〉であるのに対して、二宮の姫君から女君へのそれは〈形代〉(21)であって、両者の間には差異が生じているのである。紫上が「幸ひ人」(若菜下巻)と他者の口を通して語られたの

に対して、女君は二宮との関わりのために失踪を三回(西の京の家→右大臣邸出仕→嵯峨野→梅尾)繰り返して、ある意味では不幸な人生を辿ることになる。そこに本物語が『源氏物語』から乖離していく状況が顕在化されているのであり、それが以下述べるごとく、女君に対する独自の人物造型となって、現出しているのである。

## 二

女君が姫君に類似していたために、二宮は「夜離れなく通ひ給」(14)うのであるが、姫君が斎院に任命されたので、二宮は、

③一日もながらふべしと思されず、ほかのことは御心にもします、ただこの(姫君ノ)ことのみ思しめし入れつつ、昼はながめ、夜は音のみ泣きつつ、いとほればれしくて、……(15)

とあるように、姫君の斎院決定が二宮に衝撃を与え、「草の庵(注一女君)も夜離れがち」になると同時に、「ほればれしまでなり給」(以上、15)い、「今はなかなかうちこもりつつ、内裏にもをさをさ参り給はず、御里(注一今出川御所)にのみおはして、よとともに、独りながめあかしくらし給」(16)う状況になったので、二宮の両親をはじめとして周囲の人々が独身でいるせいだと心配して、右大臣女との結婚を強制することになる。一方、二宮が姫君の斎院決定のショックで訪れなくなった女君に対して、「陰女」(18)になるよりは右大臣女の女房として出仕する方が良策であると乳母が勧め、その乳母の死とも相俟って、結局、女君は二宮に黙って出仕することになる。それを二宮は女君が失踪したものと誤解するわけだが、

右大臣女と結婚した二宮は、女君が女房として出仕しているのを知ることとなり、女君の方も「中将」が実は二宮であることを知るのである。さらに、「御前などにも、折々（女君ヲ）御覧する時あるにも、（二宮ノ女君ニ対スル）御気色やしるかりけむ、かたはらにてはとかく言ひ騒ぐ人もあるを」（34）と語られているごとく、周囲の女房たちも二人のことをうわさし始めるようになったために、女君は侍女の侍従とともに、女君の父親の所領であった嵯峨野に出踪することになる。そこで女君は出家するわけだが、それも二宮の知ることになったので、さらに奥深い梅尾に遁世して仏道修行に励むことになる。

ところで、女君の行動の経緯を考えると、乳母の死後、「そのままうち臥して、なかなか枕ももたげず、湯水をだに御覧し入れぬ」（19）状況であったが、侍従の説得によって、「しめやかなる夕ぐれなどには御枕少しもたげつつ行なひ給ふ」、「いとど物悲しく、あけくれ行なひのみしておはしける」（以上、20）ようになったと語られている。それは、乳母が成仏するように女君が経を唱えており、仏道への関心がないわけでもないと考えられるが、二宮とのことが右大臣女の女房たちの間で取り沙汰されるようになったために、

④かの乳舟の君などのやうに、我とは水の底にもえ思ひ沈むまじきを、いかに  
もして死ぬる葉もがなと思ひ嘆き給ふに、……（34）

と、死への願望が強くなり、「いかにもして死なむと念ずれどもそれさへかなはぬ身にしあ」（34）るために、「いかにもしてここ（注：右大臣邸）をのがれつつ深き山にとちこもり、後の世を願」（35）おうとして、嵯峨野に侍従とともに失踪して、「もし（二宮ニ）見つけられ奉りて、いかに憂き

さまにかあひ、またはあらざらむ名も流れなむと思」（37—38）して、二人で出家を遂げるのである。その後は、

⑤いとど行なひにのみ心を入れつつ、あけくれ経読み、念仏申しつつ、いとどの  
どかにあかしくらし給ふに、……（38）

とあり、「はかなきこと（注：和歌）にもよははや思ひ離れつつ過ぐし給ふ」（38）ようになり、「ただ行なひにのみ心を入れ」るわけだが、「情なくつらしと思ふ人（注：二宮）も、かへりてはこの道のしるべにてやありけむ」（以上、39）とあるごとく、二宮とのことが女君にとって出家の契機となつたと語られている。その嵯峨野も二宮に発見されたので、「つひに隠れあらじを、またもおはしなばいとびんなきわざなり」と考えて、梅尾に赴き、そこで「その後はなほ古よりあらまほしく庵占めつつ、いとど行なひすましておはしけるとぞ」（以上、43）と語られているように、女君の仏道修行で擱筆されているのである。

ちなみに、女君は嵯峨野に失踪するにあたって、右大臣邸の自分の局に「ながらへばなほも憂き身は白雲の八重立つ山をわけぞ見るべき」（37）の歌を「片仮名」で書き付けたということは何を意味するのであろうか。

これは女君の失踪後、女君と親しい中納言君が発見したわけだが、「平仮名」Ⅱ《女文字》ではなく、「片仮名」Ⅱ《男文字》で書いたということ（4）は、《女》でありながら、《女》であることを拒否しようとする意志表示であると考えられ、二宮に対する心の《ゆらぎ》があったとしても、それを抹殺して出家していこうとする堅固な意志の表出であったのだ。

ではなぜこのような女君が造型されたのだろうか。それは『三宝絵』による影響ではないかと考えられる。『三宝絵』は冷泉帝第二皇女尊子内親

王（十七歳の天元五年（九八二）に出家したとされている）に源為憲が永観二年（九八四）十一月に内親王が仏道に専念する目的で執筆した仏道入門書であって、『大鏡』に「この宮（注―尊子内親王）に御覽せさせむとて、三宝絵はつくれるなり」<sup>(5)</sup>（伊尹伝）と語られており、さらに、

『扶桑略記』や『今昔物語集』に摂取の跡の顯著であることも今更言を俟たぬ所であるし、保安元年（一二二〇）書写の名博本（注―名古屋市博物館本）も現存している。『宝物集』（一二八八年頃までに成立）への影響も明らかで、『三宝絵』は当時世間に流布していたものと思われる。<sup>(6)</sup>

と述べられていることにより、『兵部卿物語』の作者はこの『三宝絵』に依拠して、女君の造型を企図したのではなからうか。その『三宝絵』の中には、

○酔ノ迷ヒ戯レノ衣成リシダニ善根ツヒニ空シカラザリケレバ、賢キ心、実ノ志ナルハ、功德イヨイヨ量リ難シ。<sup>(7)</sup>（上・序）

○吾ガ心ニ迷ヒヲ離ルレバ、仏ノ位顯ハレナムトスルコト、……

（上・般若波羅蜜）

と記されているように、女君に二宮から再度発見されないようにという他律的な原因があったとしても、女君の梅尾移居という決意は仏道修行の深化であるとともに、賢明な選択であったのであり、そこに『三宝絵』に基づいた女君の人物造型の核があったのではないかと考えられる。すなわち、『三宝絵』が尊子内親王という一人の特定の個人に対して書かれたものとは異なり、「物語ト云テ女ノ御心ヲヤル物」（上・序）という観点に立脚して語られたのが本物語であり、それは仏道に専念すれば、悟りの境地に到

達することが可能であると女性たちに仏道に興味を持たせ、さらに、仏道修行を深化させるべく、『三宝絵』の内容を容易に実践させようとして、女君を例にあげて物語風に綴られた作品ではなかったのだろうか。とすれば、本物語の主人公は女君であると同時に、従来より作者未詳と言われてきたわけだが、<sup>(8)</sup>具体的な作者名は不明であるものの、作者は女性ではなかったのかと臆測されるのである。

### 三

女君が二宮に右大臣女への出仕の件を明確に告げなかったために、二宮が西の京に女君を訪れたところ、行方不明になっていたので、「我が途絶えを恨みつつほかにうつろひぬるか、さらずはこの程ひまにいかなる好色者か見つけて取り隠しつや」<sup>(25)</sup>と疑いを持ち、「深く忍びぬる名隠しをまことと思ひつるにや、余り心深きもかへりて身のあたなりけり」<sup>(26)</sup>と内省し、これ以降も「余り御心深く御名をもかへて包み給ひしかば」<sup>(31)</sup>と語られているように、二宮が「中将」という偽名を用いて女君に接したことが、女君の人生史の変曲点となってしまったと慙愧の念を抱いていることが理解される。それが女君の将来の人生に重大な影響を及ぼしてしまった点に関しては、二宮は悔恨に終始しているだけであって、

○麻の衣はしほなれたれど、移り香いとなつかしきをうちかけて、……

○香染めの扇の移り香なつかしきに、数珠うち置きてあり。（以上、42）

と語られているごとく、二宮に女君の存在を強く認識させたものは「移り香」だったのだ。それは二宮と女君との決定的な差異なのであって、二宮

にとって今後この「移り香」だけが女君を想起させる指標であったのを考えると、二宮は女君の仏道修行深化のための引き立て役にしか過ぎなかったのだといえよう。

このように出家して仏道への思いを深化させていった女君は二宮とは対照的に造型されているのであって、そこに〈女〉としての生き方が問われているのではなからうか。とすれば、本物語は『三宝絵』を念頭に置きながら、〈女〉のために物語風に点綴された仏道指南書であったのだ。

注(1) 『兵部卿物語』の本文は鎌倉時代物語集成によるが、私に表記の一部を改めた個所がある。なお、算用数字は該当ページ数を示す。

(2) 『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集による。

(3) 『狭衣物語』では狭衣大将の母親堀川上の兄である先帝の娘の源氏宮は、狭衣大将と従兄妹同士であり、幼少時より狭衣大将と一緒に暮らしてきたのである。その点『兵部卿物語』は父親の系図に関わることであって、系図上は多少異なるが、二人の育てられ方は同じである。このあたりの構想が『狭衣物語』と類似していることは、既に宮田和一郎『兵部卿物語』(武庫川女子大学紀要 第四集 一九五七)が指摘している。

(4) 大倉『石清水物語』試論(学苑 二〇〇八・8)に触れておいた。

(5) 『大鏡』の本文は新編日本古典文学全集による。

(6) 小泉弘『『三宝絵』の後代への影響』(新日本古典文学大系『三宝絵・注好選』解説)

(7) 『三宝絵』の本文は注(6)前掲書によるが、私に表記の一部を改めた個所がある。

(8) 最近では、六年ほど前に刊行された『中世王朝物語・御伽草子事典』(勉誠出版 二〇〇二・5)においても作者を未詳としている(佐藤愛執筆)。